

神聖喜劇

映画文学人生論

原作：大西巨人（1960-80）「新日本文学」ほか

第一部「絶海の章」	(1960)	第五章「雑草の章」	(1969)
第二部「混沌の章」	(1963)	第六章「迷宮の章」	(1976)
第三章「運命の章」	(1968)	第七章「連環の章」	(1977)
第四章「伝承の章」	(1969)	第八章「永劫の章」	(1979)

私は女陰なきを憂うる。男根なきを憂えない。軍隊は男根所有者の多きに堪えない。

野間宏『真空地帯』を読んで、軍隊の兵営生活がどんなものかを知り、自分が平和な時代に生まれて、軍隊に召集されずにすんだ幸運を有難いと思った。その『真空地帯』を「俗情との結託」と批判したのが大西巨人だ。売れることを目的として面白く書いた作品というような意味らしい。

しかし、文学は俗情にうったえなければ読まれないと思う。『真空地帯』は今や俗情にほど遠い難解な純文学作品である。私も山本薩夫監督の映画を観てやつと筋をほぼつかむことができた。俗情と結託せずに文学は成立し得るだろうか。

大西巨人『神聖喜劇』の主人公は東堂太郎二等兵。博覧強記の虚無主義者だ。彼が兵営に持って来た書物は、『広辞林』『改訂コンサイス英和辞典』『田能村竹田全集』『緑雨全集』『民約論』などだが、他に『暴力論』上下二巻と洋書の『歌の本』『武器よさらば』があるが、「目下なお検討中」として所属隊長が預かっている。

この程度なら驚くほどのことではないが、五つのころ、白楽天の『琵琶行』『長恨歌』を暗誦して両親を驚かせたり、小学生時代に上田秋成、樋口一葉の小説、森鷗外の『うた日記』などを幾つか丸暗記した。それも特に練習してとか努力してとかいうのではない。一度読んだり聞いたりしたことは決して忘れないという。



神聖喜劇

映画文学人生論

『真空地帯』の安西二等兵と比較してみた。安西は学徒動員兵だが、のろまで、知性のかけらない。世の中に安西のような大学出のバカがいると思うと、笑えるが、そんな男を笑い物にするのは「俗情との結託」かもしれない。

一方、東堂二等兵は『軍隊内務書』や『砲兵操典』も暗記している。引用文に私はとてもついていけないが、記憶力も東堂のレベルでは武器となる。彼は上官の言動の矛盾を指摘し、わが国の軍隊の無責任の体系をあかるみにしてしまう。

ユーモアもある。土岐哀果の「たそがれの、やどやの風呂に、めずらしく、わがちんぽを覗きたるかも」を思い浮かべたり、「私は女陰なきを憂うる。男根なきを憂えない。軍隊は男根所有者の多きに堪えない」という感慨を覚えたりする。

森鷗外が『伊澤蘭軒』の難解な文章への批判に答えた「私は学殖なきを憂うる。常識なきを憂えない。天下は常識に富める人の多きに堪えない」のもじりで笑わせてくれるが、これもジレットタントという「俗情との結託」といえなくもない。

しかし、作者は『カラマーズフの兄弟』からも引用している。「アレクセイさん、あなたは、とても立派な人ですが、どうかすると、まるで術学者（ペダント）のようだよ。——でも、よく見ると、あなたは決して術学者ではないのね」。

玄界の冬浪を大とみて寝（い）ねき 山口誓子